

水戸短編映像祭 声明文

市内の各所で町おこしのイベントが催され賑わいを見せていた「水戸の日」である3月10日の翌日、奇しくも今年度最初の打ち合わせを予定していた3月11日に、あの未曾有の大震災は起きました。劇場から人々の足が遠のき、全国各地で小さな劇場が相次いで消えている現実を真摯に見つめ、これからの地方の映画祭が担う役割と継続の意義を問い直しつつ、新しい提案を試みていきたい—そうした目標を掲げ、今年で第15回目を迎える「水戸短編映像祭」は今回を一つの節目として、新たな一步を踏み出そうとしていた、その矢先の出来事でした。

地震と津波によって多くの人命が失われ、追い打ちをかけるように起きた原発事故によって長期的な苦難を強いられることになった東北地方の被災地へ支援のエールを送りながら、震災で広範囲に被災した茨城も、この5カ月の間、力強く復興への道のりを歩んできました。娯楽であり芸術であり記録のメディアである映画が、震災後の世界で出来ること、担うべき役割を問い、映画に関わる多くの人たちが試行錯誤のなか行動を始めています。そして私たちも開催そのものが危ぶまれた「第15回水戸短編映像祭」の実現に向けて動き出しました。

「以前」と「以後」を残酷に分けてしまう決定的な出来事に直面したとき、その困難に立ち向かい、乗り越えていこうとする人間の姿を、私たちはスクリーンの中で何度も目撃し、驚き、胸を打たれ、勇気づけられてきたはずです。そんな映画の力を私たちは信じたいと思います。映画が誕生してから100年余りの年月の中で、映画と人が共に歩んできた長い道のりの最前線に立つ者の一員として、私たち「水戸短編映像祭」のスタッフも、協力に名乗りを上げてくださった企業や団体、個人、そして各地の映画祭と連帯し、今こそ必要とされる映画祭を目指します。

この苦境の中で各地の映画祭が開催されたという事実が、スクリーンに映し出される映画と共に、多くの人々の記憶の中に刻まれていくことを私たちは望みます。そして、震災の傷が少しずつ癒えてゆき、その先に続くこれまでとは異なる日常の風景の中にも「映画」が存在し、それを見る人々の人生を豊かに彩る瞬間が再び訪れることを切に願っています。

NPO法人シネマパンチ 水戸短編映像祭実行委員
平島悠三

2011年8月11日
東日本映画祭ネットワーク 合同記者会見にて